

島根県獣医師会報



—2025.8— NO.45

公益社団法人 島根県獣医師会

表紙説明

『島根県獣医師会のロゴマーク』

このロゴマークは、日本獣医師会が商標登録している「へびと杖のマーク」の使用申請を行い、公益社団法人島根県獣医師会を英語表記したものです。

目 次

会議報告

- 1 令和7年度島根県獣医師会通常総会 _____ 1
- 2 令和7年度島根県獣医師会支部長及び事務局担当者合同会議 _____ 2
- 3 令和7年度島根県獣医学会委員会 _____ 3

学会報告

- 1 令和4年度島根県獣医学会 _____ 4
- 2 令和4年度獣医学術中国地区学会 _____ 6
- 3 第40回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和4年度） _____ 8
- 4 令和5年度島根県獣医学会 _____ 9
- 5 令和5年度獣医学術中国地区学会 _____ 11
- 6 第41回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和5年度） _____ 13
- 7 令和6年度島根県獣医学会 _____ 16
- 8 令和6年度獣医学術中国地区学会 _____ 18
- 9 第42回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和6年度） _____ 19

情勢報告

- 1 第12回全国和牛能力共進会鹿児島大会での“チーム島根”の
大活躍と次回北海道大会に向けて _____ 24

トピックス

- 1 獣医療関係者の感染防御対策について _____ 25
- 2 EU査察における牛肉輸出に係る指摘事項への対応について _____ 26
(エストラジオールを含む使用禁止薬剤不使用の確認体制の構築)

支部活動

- 1 出雲支部 令和6年度活動報告 _____ 28

会 議 報 告

1 令和7年度島根県獣医師会通常総会

令和7年5月30日（金）、島根県民会館において、会員21名（委任状122名）の出席により令和7年度島根県獣医師会通常総会を開催しました。

安食会長の挨拶の後、長谷川利寿会員（松江支部）が議長に選出され議長席につき、本通常総会は適法に成立したので、開会する旨を宣し、定款の規定に基づき議事録署名人2名を選任し直ちに議事に入りました。議事では、承認事項として4つの議案、1つの報告事項が提出され、承認事項はすべての議案について満場一致で承認されました。

承認事項及び報告事項は次のとおりです。

【承認事項】 第1号議案 令和7年度事業報告及び収支決算について

第2号議案 名誉会員の推薦について

名誉会員は、渡部正美会員（出雲支部）、渡辺 進会員（浜田支部）

第3号議案 任期満了に伴う役員の選任について

第4号議案 その他

【報告事項】 令和7年度事業計画及び収支予算等について

総会后、直ちに第1回理事会を開催し、総会で選任された理事の中から、会長1名、副会長2名、常務理事1名を選定しました。新体制は下表のとおりです。

（敬称略）

役 職	氏 名	選出区分	
会 長	安食 政幸	農業・公衆衛生団体・会社その他	留任
副会長(学会担当)	黒田 治	開業関係（小動物）	留任
副会長(総務担当)	横田 司	松江ブロック（松江支部）	新任
常務理事	小島 晴雄	事務局関係	新任
理 事	須山 隆行	松江ブロック（安来支部）	新任
”	内藤 克志	出雲ブロック（雲南支部）	新任
”	長谷川清寿	出雲ブロック（出雲支部）	新任
”	大原 和彦	石見ブロック（石東支部）	新任
”	柳 俊徳	石見ブロック（浜田支部）	留任
”	古岡千代次	石見ブロック（石西支部）	留任
”	濱村圭一郎	畜産及び家畜衛生関係（県職員）	新任
”	中村 祥人	公衆衛生関係（県職員）	留任
”	中倉 亨	家畜共済・開業（産業動物）関係	留任
”	廬原 美鈴	女性獣医師関係	新任
監 事	高仁 敏光	全県	新任
”	川上 祐治	全県	新任
”	川津 章弘	法人外部	新任

新役員あいさつ

この度の総会及び理事会において、歴史ある島根県獣医師会の役員の一員として重責を担うこととなりました。身の引き締まる思いで一杯です。微力ではありますが、島根県獣医師会の目的を少しでも果たせるよう、適正な業務執行に努め、会員の皆様はもちろん会員以外の皆様からみても「魅力ある島根県獣医師会」になるよう頑張っていく所存ですので、引き続き、皆様方の御理解と御協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

新副会長（総務担当） 横田 司
新常務理事 小島晴雄

2 令和7年度島根県獣医師会支部長及び事務局担当者合同会議

令和7年6月12日（木）、島根県民会館において、令和7年度支部長及び事務局担当者合同会議を開催しました。事務局から下の5議題について説明した後、支部の活発な活動に向けて意見交換を行いました。

- ① 令和7年度の会費等の額及び納入期限について
- ② 令和7年度支部必要経費について
- ③ 令和7年度島根県獣医師会の主な活動について
- ④ 狂犬病予防業務について
- ⑤ 島根県獣医師連盟の活動について

令和7年度 新たな各支部の体制は下表のとおりです。

（敬称略）

支部	会員数	支部長	事務局
松江	51	毛利 崇（もうり動物病院）	藤原浩美（松江家畜保健衛生所）
安来	10	須山隆行（東部家畜診療所）	吉川美智恵（東部家畜診療所）
雲南	16	内田博道（雲南家畜診療所）	板井恵子（雲南家畜診療所）
出雲	60	佐々木真紀子（出雲保健所）	廣江朋子（家畜病性鑑定室）
石東	37	三田哲朗（食肉衛生検査所）	小川康太（川本家畜保健衛生所）
浜田	15	三島有紀（しまね海洋館）	田邊大士（浜田保健所）
石西	32	岸本昌也（益田大動物診療所）	齋藤 茂（石西家畜診療所）
隠岐	8	野田浩正（知夫村）	角 郁夫（松江家畜保健衛生所隠岐支所）
計	229		

3 令和7年度島根県獣医学会委員会

令和7年6月12日（木）、島根県民会館において、令和7年度第1回島根県獣医学会委員会を開催しました。長谷川清寿学会委員長を議長にし、事務局が令和7年度の島根県獣医学会開催計画（案）及び開催実施要領（案）を説明した後、各学会委員により議論が行われました。その結果、令和7年度の島根県獣医学会は、（2）のように「研究発表」と2つの「交流セミナー」を行うこととしました。なお、研究発表、交流セミナー等の詳細については、別途お知らせします。

（1）令和7年度島根県獣医学会委員会メンバー

（敬称略）

区 分	氏 名	所 属
学会長	安食 政幸	島根県獣医師会会長
副学会長	黒田 治	島根県獣医師会副会長
〃	横田 司	〃
学会委員長（産業動物部門）	長谷川清寿	島根県畜産技術センター
学会副委員長（小動物部門）	黒田 治	とかみ動物病院
〃 （獣医公衆衛生部門）	田原 研司	（公財）島根県環境保健公社
学会委員（産業動物部門）	大谷 拓郎	島根県出雲家畜診療所
〃	加地 紀之	島根県畜産課
〃	船木 博史	島根県松江家畜保健衛生所隠岐支所
〃	東 智子	島根県出雲家畜保健衛生所
学会委員（小動物部門）	塚根 悦子	アスリー動物病院
〃	白濱 潤	出雲ペットクリニック
〃	毛利 崇	もうり動物病院
〃	野中 雄一	のなか動物病院
学会委員（獣医公衆衛生部門）	宮本 毅	島根県薬事衛生課
〃	中村 祥人	島根県食肉衛生検査所
〃	川瀬 遵	島根県保健環境科学研究所
〃	昌子 暢賢	島根県雲南保健所
〃	佐々木真紀子	島根県出雲保健所

（2）令和7年度島根県獣医学会の開催概要

1 開催日時 令和7年8月31日（日）9:00～16:30

2 開催場所 松江テルサ 4階 中会議室

3 開催内容 研究発表 23題

交流イベント① 演 題 「ハズバンダリートレーニング」

講 師 島根県立しまね海洋館 アクアス

海獣展示課 課長 三島 有紀 先生

技師 水野 美華 先生

交流イベント② テーマ 「もっと美味しくコーヒーを」

講 師 C A F F E V I T A （カフェ ヴィータ）

門脇 裕二 先生

1 令和4年度島根県獣医学会

獣医師会事務局

令和4年度の県獣医学会を7月28日(木)～8月11日(木) Web開催しました。
本年度の発表演題数は、産業動物部門14題、小動物部門3題、獣医公衆衛生部門4題の合計21題でした。

なお、選考委員会において、学会長賞及び知事賞の選考並びに9月3日・4日の両日、山口市において開催される令和4年度獣医学術中国地区学会への県代表の選考が行われました。

発 表 演 題 (21題) Web開催

【産業動物部門】

- 1 めん羊の病性鑑定2事例
松尾治彦(島根県東部農林水産振興センター出雲家畜衛生部)
- 2 野生イノシシにおける豚熱サーベイランス
源田隆志(島根県家畜病性鑑定室)
- 3 BVDVダイレクトリアルタイムRT-PCR法の検討
角 華苗(島根県家畜病性鑑定室)
- 4 県内のアライグマにおける基質特異性拡張型βラクタマーゼ産生大腸菌の保有状況
鈴木郁也(島根県家畜病性鑑定室)
- 5 ミニブタに認められたAAアミロイド症
濱田悠太(島根県家畜病性鑑定室)
- 6 繁殖検診におけるPG単回投与に伴う卵胞囊腫の発生と予後
菅原祐樹(島根県農業共済組合雲南家畜診療所)
- 7 慢性血尿症を主訴としたT細胞性リンパ腫のサラブレッド一症例
板井恵子(島根県農業共済組合雲南家畜診療所)
- 8 腸炎を繰り返す成ヤギに対し行ったイベルメクチン製剤投与プログラムの変更
小濱万祐子(島根県農業共済組合石見家畜診療所)
- 9 ラテックス凝集免疫比濁法を用いた健康牛・疾病牛における血清アミロイドA(SAA)の測定
齋藤英利香(島根県農業共済組合家畜臨技センター)
- 10 門脈造影検査下にて実施した短絡血管結紮法により治癒した先天性肝外門脈体循環シャントの黒毛和種子牛1症例
加藤圭介(株式会社益田大動物診療所・島根県)
- 11 黒毛和種子牛における慢性銅中毒の関与が疑われた農場に対する飼料中銅濃度の再考
原 知也(株式会社益田大動物診療所・島根県)
- 12 趾皮膚炎に対するアセチルヒドロキシプロリンと湿潤療法併用による治療効果の検討
高橋海秀(株式会社益田大動物診療所・島根県)
- 13 血液凝固能に対して牛の種差が与える影響の解明
番場聡太(株式会社益田大動物診療所・島根県)
- 14 バルク内における *Staphylococcus aureus* 検出低減を目的としたタイロシンとピルリマイシン併用による乾乳期治療効果
澤松祐人(株式会社益田大動物診療所・島根県)

【小動物部門】

- 1 5 高分化型消化器型リンパ腫の猫の 3 例
毛利 崇（もうり動物病院・島根県）
- 1 6 鼻腔リンパ腫の猫の 5 例
毛利 崇（もうり動物病院・島根県）
- 1 7 重症熱性血小板減少症候群（SFTS）疑いの猫の 1 例
野中雄一（のなか動物病院・島根県）

【獣医公衆衛生部門】

- 1 8 当所で診断した豚丹毒はほとんどが生ワクチン株によるものであった
黒崎守人（島根県食肉衛生検査所）
- 1 9 当所で分離した豚丹毒菌生ワクチン株（Koganei 65-0.15 株）における ERH_0661 のフレームシフト変異
黒崎守人（島根県食肉衛生検査所）
- 2 0 豚の胸腺腫の症例報告
山本裕子（島根県食肉衛生検査所）
- 2 1 島根県で初めて確認されたカルバペネマーゼ産生腸内細菌科細菌の全ゲノムシーケンス解析
川瀬 遵（島根県保健環境科学研究所）

選 考 結 果

【 県知事賞（最優秀賞） 】

産業動物部門 受賞者：高橋海秀 （株式会社益田大動物診療所）
趾皮膚炎に対するアセチルヒドロキシプロリンと湿潤療法併用による治療効果の検討

【 優秀賞 】

小動物部門 受賞者：毛利 崇 （もうり動物病院）
高分化型消化器型リンパ腫の猫の 3 例

公衆衛生部門 受賞者：川瀬 遵 （島根県保健環境科学研究所）
島根県で初めて確認されたカルバペネマーゼ産生腸内細菌科細菌の全ゲノムシーケンス解析

令和 4 年度獣医学術中国地区学会 県代表演題

<u>産業動物部門</u>	3. 4. 8. 9. 10. 11. 12. 14
<u>小動物部門</u>	15. 16. 17
<u>獣医公衆衛生部門</u>	18. 19. 20. 21

2 令和4年度獣医学術中国地区学会

令和4年9月3日(土)～4日(日)、山口市の山口グランドホテルにおいて、令和4年度獣医学術中国地区学会が開催されました。115題(産業動物部門37題、小動物部門54題、獣医公衆衛生部門24題)の発表がありました。本県に加藤圭介会員、川瀬 遵会員の2名が学会長賞を受賞されました。

◎学会長賞(島根県の受賞者)

○日本産業動物獣医学会(中国地区)

受賞者 加藤圭介(株式会社益田大動物診療所)

演 題 「門脈造影検査下における短絡血管結紮法により治癒した先天性肝外門脈体循環シャントの黒毛和種子牛1症例」

○日本獣医公衆衛生学会(中国地区)

受賞者 川瀬 遵(島根県保健環境科学研究所)

演 題 「島根県で初めて確認されたるカルバペネマーゼ産出腸内細菌科細菌の全ゲノムシーケンス解析」

令和4年度日本産業動物獣医学会(中国地区) 概要

日本産業動物獣医学会地区学会幹事 長谷川清寿

令和4年度獣医学術中国地区学会・日本産業動物獣医学会(中国地区)が令和4年9月3、4日の両日、山口グランドホテル(山口市)において、公益社団法人山口県獣医師会の主催で開催されました。対面開催としては、令和元年以来3年振りとなりました。

産業動物獣医学会では、全体で37演題のエントリーがあり、36演題が発表されました。その発表機関別の内訳は、家畜保健衛生所・病性鑑定部署等の各県所属機関からが17題、家畜診療所・開業からが15題、大学からが4題でした。

畜種別では牛が25題と占める割合が多い傾向は従前と変わらないですが、このうち臨床治療分野に関する演題が7題、病性鑑定検査・微生物感染分野に関する演題が14題ありました。また、馬関連2題、豚関連2題、山羊関連1題、鶏関連3題、野生動物1題のほか、魚群の治療について2題の関連発表がありました。

これらの発表演題の中から、①株式会社益田大動物診療所の加藤圭介会員が発表された「門脈造影検査下における短絡血管結紮法により治癒した先天性肝外門脈体循環シャントの黒毛和種子牛1症例」、②広島県西部家畜保健衛生所の細川久美子会員が発表された「愛玩鶏で確認された鳥糸状虫症」の2題が中国地区学会長賞に選考され、令和4年11月にヒルトン福岡シーホーク(福岡県)で開催される第40回日本獣医師会獣医学術学会年次大会で地区学会長推薦演題として発表されることに決定しました。

発表内容の概要ですが、②広島県西部家畜保健衛生所の細川久美子会員の発表演題「愛玩鶏で確認された鳥糸状虫症」は、家きんにおける国内2例目の報告で、病理組織(心腔)で鳥糸状虫の成虫が確認された日本初の症例。国内1例目の鳥糸状虫との相同性を確認するとともに、農場内で捕獲したニワトリヌカカから抽出したDNAとの関連性も証明、ニワトリヌカカが媒介者(吸血昆虫)として介在した感染環が飼育場周囲に存在することを示唆しています。日常的に依頼のある病性鑑定業務の中から、丹念に検査して、結果を導き出す姿勢が十分にうかがえる報告でした。

もう 1 題の選出演題である、①株式会社益田大動物診療所の加藤圭介会員が発表された「門脈造影検査下における短絡血管結紮法により治癒した先天性肝外門脈体循環シャントの黒毛和種子牛 1 症例」については、島根県獣医学会で発表されているため、本稿による内容紹介は割愛します。

以上、令和 4 年度日本産業動物獣医学会（中国地区）の概要を紹介しました。このたび対面開催が実現されての学会運営ということで、会場内外で活発な意見交換の場が形成されており、獣医学術の発展や人材育成の観点で重要な機会であると改めて感じたところです。

令和 4 年度日本獣医公衆衛生学会（中国地区）概要

日本獣医公衆衛生学会地区学会幹事 福島 博

令和 2 年度と 3 年度獣医学術中国地区大会は令和元年に松江市で開催された後、新型コロナウイルスパンデミックにより対面形式の発表会は中止されましたが、令和 4 年度獣医学術中国地区学会は令和 4 年 11 月に開催されるアジア獣医師会連合（FAVA）大会と連携開催される第 40 回年次大会での発表者の選考を兼ね例年よりも一ヶ月早く山口県で開催されました。ウイズコロナの下、会場ではテーブルの真中に飛沫防止アクリルパーテーションが設置され、発表、質疑応答ごとのマイクの消毒等万全のコロナ対策が施され行われました。獣医公衆衛生学会の発表演題数は例年より数題少ない 24 題でしたが、学会の始まりの挨拶の中で本学会に発表された内容を論文に纏められ獣医師会雑誌に投稿されるようお願いされた獣医公衆衛生学会副会長の植田富貴子教授（日本獣医生命科学大学）から中国地区大会は他地区に比較し演題数が多いと感心されていました。地区によっては 4 演題のところもあるそうです。発表は二日に分けて行われ、9 月 3 日の午後には主に動物愛護関連の 9 演題、4 日の午前には食肉衛生検査所からは腫瘍の病理所見が 4 演題、と畜場や食鳥処理場の衛生管理が 3 演題、病原微生物の分離と性状の解析が 3 演題、衛研、大学等からの病原微生物の分離と性状の解析が 5 演題発表されました。第 40 回年次大会での地区学会長賞受賞講演には下記 2 演題が推薦されました。その要旨は以下のとおりです。

「島根県で初めて確認されたカルバペネマーゼ産生腸内細菌科細菌の全ゲノムシーケンス解析」川瀬 遵（島根県保健環境科学研究所）・・・カルバペネム耐性腸内細菌感染症は感染症予防法の五類感染症に分類され、その中でもカルバペネマーゼ産生腸内細菌科細菌（CPE）は院内感染対策上重要であり、One World One Health の観点からも注目されている。今回、島根県の病院検査室で初めて確認された CPE 同定困難株（表現型検査陽性、カルバペネマーゼ産生遺伝子の PCR 検査陰性）について次世代シーケンサーを用いた全遺伝子のシーケンス解析を行い、既知の抗菌薬耐性遺伝子のシーケンスとの照合（ResFinder）、さらに遺伝子型タンパク質のコーディング領域（CDS）の解析により、被験菌株は遺伝子 IMI 型のバリエーションである *bla_{IMI-8}* に最も相同性が高いが、完全に一致しない新規バリエーションであることを明らかにし、GenBank に *bla_{IMI-24}* として登録した。

「原因不明の集団胃腸炎事案および食中毒事案におけるサポウイルスのブロードリアクティブ・リアルタイム PCR を用いた遡り調査」鈴藤 和（広島県立総合技術研究所保健環境センター）・・・広島県で発生した原因不明の集団胃腸炎および食中毒事案を対象とし、当センターで開発したサポウイルス（SaV）を含む 10 種類の胃腸炎関連ウイルスを包括的に検査できる蛍光マルチプレックスリアルタイム PCR と SaV 全 18 種の遺伝子型に対応したリアルタイム PCR を用いた遡り調査を行い、県内で 2015/16 及び 2018/19 シーズンに SaV GII.3 の地域流行による集団

胃腸炎が発生していたことを始めて明らかにした。

トピックス：「広島県動物感染症サーベイランスシステムと SFTS 発生状況」山岡弘二（広島県獣医師会）・・・広島県獣医師会は 2020 年に動物病院の PC から獣医師会の PC へ感染情報を送信集計する動物感染症サーベイランスシステムを構築し、感染情報の共有を図っている。重症熱性血小板減少症候群（SFTS）についてはウイルスの遺伝子検査を行った。SFTS 陽性数は犬 2 頭、猫 20 頭であった。陽性地域は県北部と瀬戸内沿岸部に分布し、2021 年以降、患者多発地域では動物病院あてに「SFTS 多発」の注意喚起を行った。2022 年 4 月以降、猫 SFTS はヒト SFTS と同地域でヒトより若干先行して発生する傾向がみられ、今後その動向を注視する必要がある。

3 第 40 回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和 4 年度）

令和 4 年 11 月 11 日（金）～13 日（日）、福岡市のヒルトン福岡シーホークにおいて、第 40 回日本獣医師会獣医学術学会年次大会が開催されました。本会からは 7 名の会員が参加しました。そのうち、加藤圭介会員、川瀬 遵会員の 2 名の会員が講演を行いました。

第 40 回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和 4 年度 福岡）概要

日本獣医公衆衛生学会地区学会幹事 福島 博

未曾有のコロナパンデミックで対面の講演が 2 回中止されていた獣医学術年次大会が令和 4 年 11 月 11 日から 13 日に福岡ソフトバンクホークスのホームスタジオ PayPay ドームに隣接するヒルトン福岡シーホースで第 21 回アジア獣医師会連合（Federation of Asia Veterinary Associations (FAVA)）大会と合同で開催され、獣医公衆衛生学会に参加しましたのでその概要を報告します。ホテルの 1F と 3F フロアーの 7 会場で FAVA と第 40 回獣医三学会が同時進行で行われました。FAVA では『ONE HEALTH APPROACH FROM ASIA 動物と人の健康は一つ。それは地球の願い。』をテーマに特別シンポジウム COVID19 とワンヘルス、人と動物の共通感染症とワンヘルス、薬剤耐性とワンヘルスおよび各分野及び機関におけるワンヘルスの取り組みが企画され日・英の同時通訳、各分野における招待講演は英語で講演しました。FAVA の今回のテーマからしても獣医公衆衛生がこれからますます重要になることを実感しました。初日の午前中には河岡義裕博士（国立国際医療研究センター 国際ウイルス感染症研究センター長）による記念講演『新興感染症の征圧を目指して』がありましたが、当日出雲→福岡飛行機便で参加しましたので聴講できませんでした。獣医公衆衛生学会の地区学会賞受賞講演の演題数はコロナ下のためかこれまでで最も少ない 10 演題でした。島根県からは環境保健科学研究所の川瀬 遵会員が「IMI 型カルバペネマーゼ遺伝子の新規バリエーションを保有する *Enterobacter cloacae* complex の全ゲノム解析」（中国地区学会長賞受賞演題）を発表されました。地区学会賞受賞講演で最も優秀な学会賞には谷口喬子ほか（宮崎大・産業動物防疫リサーチセンター）が発表された「火山灰土壌を用いた水質浄化技術開発に向けた研究」が選考されました。また、日本獣医師会雑誌に発表された論文を対象とした獣医学術奨励賞には南 昌平（山口大学）「野生動物でのオーエスキー病ウイルスの異種間伝播」が、長年に亘る獣医学術、教育への功労が認められた獣医学術功労賞には林 賢一：滋賀県衛生科学センター元所長が滋賀県におけるボツリヌス食中毒予防に関する研究で選考・表彰されました。3 賞の受賞研究業績の要旨は獣医師会雑誌 Vol.76：No.2、p 79 を参照ください。

獣医公衆衛生学会シンポジウム「食中毒制御の成功例から学ぶ対策と課題」では 2003 年に設立

された食品安全委員会における腸管出血性大腸菌、サルモネラ属菌、カンピロバクター、リステリア等のハザードに関するリスク評価と結果、今では姿を消した腸炎ビブリオと鶏卵によるサルモネラ食中毒制御の成功例が報告され、若い会員からはこのような事実は全く知らなかったので何らかの形で情報発信してほしいとの要望がなされた。腸炎ビブリオ食中毒は 1998 年に急激な増加を受け防止対策が検討され、魚介類の洗浄・加工に殺菌海水等の使用や 4℃以下管理、菌数などの成分規格の設定、喫食までの時間の提示と関係営業者の指導・監視の実施により減少した。サルモネラ特にエンテリティデス（SE）食中毒は 1996 年からの急増に対応し、発生防止に関する分科会の検討結果を踏まえ 1998 年に食品衛生法施行規則、食品・添加物等の規格基準の一部改正（殻付き卵、液卵の表示および調理基準、液卵の規格基準）と業界の協力により激減し、その後 HACCP の導入などによる衛生管理の向上により引き続き減少傾向にある。この基準改正は SE 食中毒の元々の原因は卵内汚染（in egg 汚染、0.03%）と推定されたが、産卵後新鮮卵の内部汚染菌数は極めて低く抑えられており、産卵後一定期間内であれば、たとえ人が生食しても食中毒を引き起こす可能性は低いものと考えられる調査研究成果に基づいて実施されたと解説された。

4 令和 5 年度島根県獣医学会

獣医師会事務局

令和 5 年度の県獣医学会を 8 月 20 日（日）松江市朝日町「松江テルサ」4 階中会議室において開催しました。

本年度の発表演題数は、産業動物部門 14 題、小動物部門 4 題、獣医公衆衛生部門 4 題の合計 22 題でした。

また、交流イベントとして、しまね海洋館アクアス動物管理監 三島有紀 先生に「しまね海洋館アクアスのバックヤードにおける獣医療」と題してご講演をお願いいたしました。

なお、発表終了後、選考委員会において、学会長賞及び知事賞の選考並びに 9 月 30 日・10 月 1 日の両日、米子市において開催される令和 5 年度獣医学術中国地区学会への県代表の選考が行われました。

発 表 演 題 （ 2 2 題 ）

- 1 牛の腸管外病原性大腸菌感染症例における分離株の病原因子検索
鈴木郁也（島根県家畜病性鑑定室）
- 2 牛伝染性リンパ腫発症マーカーとしてチミジンキナーゼ活性を測定した牛 18 症例
齋藤英利香（島根県農業共済組合家畜臨床技術センター）
- 3 抗体検査および糞便検査による疾病予防プログラムの評価と再設定
板井恵子（島根県農業共済組合雲南家畜診療所）
- 4 牛の寄生虫性疾患（単包虫症を疑う）
服部貴通（島根県食肉衛生検査所）
- 5 鶏肉および野生動物におけるサルモネラの保有実態と人由来株との比較
野村亮二（島根県保健環境科学研究所）
- 6 当所における PCR 法による敗血症起因菌の同定
黒崎守人（島根県食肉衛生検査所）

- 7 島根県内で発生したネコおよびヒトの SFTS 症例の比較
藤澤直輝（島根県保健環境科学研究所）
- 8 黒毛和種育成牛に発生した小脳皮質変性症の 1 例
濱田悠太（島根県家畜病性鑑定室）
- 9 黒毛和種繁殖牛の突発性片側性結膜炎の 1 症例
森 明理（島根県農業共済組合出雲家畜診療所）
- 1 0 超音波及び注腸 X 線造影にて直腸膿瘍を伴う鎖肛と診断し、瘻孔拡張術により完治した
黒毛和種新生子牛 1 例
澤松祐人（株式会社益田大動物診療所・島根県）
- 1 1 県内養豚場における豚熱ワクチン接種適期の検討
源田隆志（島根県家畜病性鑑定室）
- 1 2 管内における野生イノシシ豚熱感染事例
門脇拓馬（島根県西部農林水産振興センター益田家畜衛生部）
- 1 3 グルテンフリーの食餌で改善した発作性ジスキネジアの犬の 1 例
野中雄一（のなか動物病院・島根県）
- 1 4 血液ガス分析で評価したウサギの全身麻酔時の死腔容積と換気状態の関連
毛利 崇（もうり動物病院・島根県）
- 1 5 長期間ウイルス血症が持続した SFTS の猫の 1 例
毛利 崇（もうり動物病院・島根県）
- 1 6 術後再発した腸腺癌にニムスチン塩酸塩 (ACNU) を使用した犬の 1 例
松本泰和（有限会社益田ペットクリニック・島根県）
- 1 7 飼養形態の異なる 3 酪農場におけるクロストリジウム属菌の抗体保有状況
板井恵子（島根県農業共済組合雲南家畜診療所）
- 1 8 出血性腸症候群 (HBS) に対する消化酵素を含んだ消化機能障害治療剤の効果
番場聡太（株式会社益田大動物診療所・島根県）
- 1 9 出血性腸症候群に対する核酸含有吸着剤添加の効果
高橋海秀（株式会社益田大動物診療所・島根県）
- 2 0 コクシジウム症に対するコロナウイルスの関与
下場 仁（株式会社益田大動物診療所・島根県）
- 2 1 高蛋白高脂肪の代用乳による子牛の発育試験
原 知也（株式会社益田大動物診療所・島根県）
- 2 2 畜産農家の経営向上に向けた DX 化とその効果の検証
吉村直彬（島根県農業共済組合石見家畜診療所）

選 考 結 果

【 県知事賞（最優秀賞） 】

公衆衛生部門 受賞者：藤澤直輝 （島根県保健環境科学研究所）
島根県内で発生したネコおよびヒトの SFTS 症例の比較

【 優秀賞 】

産業動物部門

受賞者：番場聡太 （株式会社益田大動物診療所）

出血性腸症候群(HBS)に対する消化酵素を含んだ消化機能障害治療剤の効果

小動物部門

受賞者：毛利 崇 （もうり動物病院）

血液ガス分析で評価したウサギの全身麻酔時の死腔容積と換気状態の関連

令和 5 年度獣医学術中国地区学会 県代表演題

<u>産業動物部門</u>	1.	2.	8.	10.	17.	18.	19.	20.	21.	22
<u>小動物部門</u>	13.	14.	15.	16						
<u>獣医公衆衛生部門</u>	4.	5.	6.	7						

5 令和 5 年度獣医学術中国地区学会

令和 5 年 9 月 30 日(土)～10 月 1 日(日)、鳥取県米子市の米子コンベンションセンターにおいて、令和 5 年度獣医学術中国地区学会が開催されました。124 題（産業動物部門 38 題、小動物部門 58 題、獣医公衆衛生部門 28 題）の発表がありました。本県の原 知也会員が学会長賞を受賞されました。

◎学会長賞（島根県の受賞者）

○日本産業動物獣医学会（中国地区）

受賞者 原 知也（株式会社益田大動物診療所）

演 題「高蛋白高脂肪の代用乳による子牛の発育試験」

令和 5 年度日本産業動物獣医学会（中国地区）概要

日本産業動物獣医学会地区学会幹事 長谷川清寿

令和 5 年度獣医学術中国地区学会・日本産業動物獣医学会（中国地区）が令和 5 年 9 月 30 日、10 月 1 日の両日、米子コンベンションセンター（鳥取県米子市）において、公益社団法人鳥取県獣医師会の主催で開催されました。

産業動物獣医学会では、全体で 38 演題のエントリーがあり、37 演題が発表されました。その発表機関別の内訳は、家畜診療所・開業・民間臨床研究所からが 19 題、家畜保健衛生所・病性鑑定部署等の各県所属機関からが 11 題、大学からが 7 題でした。

畜種別では牛が 29 題で発表全体の 8 割程度と多い傾向は従前と変わりませんが、このうち臨床診断治療分野に関する演題が 16 題、病性鑑定検査・微生物感染分野に関する演題が 12 題、繁殖技術開発に関する演題が 1 題ありました。また、馬関連 2 題、豚関連 2 題、鶏関連 3 題、蜜蜂関連 1 題の発表がありました。

これらの発表演題の中から、①広島県西部家畜保健衛生所の兼廣愛美会員が発表された「鶏マイコプラズマ検査効率化の取組」、②株式会社益田大動物診療所の原 知也会員が発表された「高蛋白高脂肪の代用乳による子牛の発育試験」の2題が中国地区学会賞に選考され、令和5年12月に神戸国際会議場（兵庫県）で開催される第41回日本獣医師会獣医学術学会年次大会で地区学会長推薦演題として発表されることに決定しました。

発表内容の概要ですが、①広島県西部家畜保健衛生所の兼廣愛美会員の発表演題「鶏マイコプラズマ検査効率化の取組」では、養鶏業に少なからずの経済的損失をもたらす鳥マイコプラズマ症の迅速診断法を検討し、特に、遺伝子検査法を改良、検出感度を高め、検査時間を短縮、定量性を保持し、作業も簡便化したものです。発育鶏卵接種法による菌分離と改良された遺伝子検査法を併用することで、鶏マイコプラズマ検査が大幅に効率化されるという面で、この研究成果は養鶏業に多大な貢献を生むと予想されます。

もう1題の選出演題である、②株式会社益田大動物診療所の原 知也会員が発表された「高蛋白高脂肪の代用乳による子牛の発育試験」については、島根県獣医学会で発表されているため、本稿による内容紹介は割愛します。

以上、令和5年度日本産業動物獣医学会（中国地区）の概要を紹介しました。このたび対面開催が再開されて2回目の学会ということで、昨年と同様に会場内外で活発な意見交換の場が形成されていました。獣医学術の発展や人材育成の観点で重要な機会であることから、島根県からの参加会員も今後増えていくことを期待したいと思います。

令和5年度日本獣医公衆衛生学会（中国地区）概要

日本獣医公衆衛生学会地区学会幹事 福島 博

令和5年9月30日と10月1日に米子コンベンションセンターで開催された令和5年度獣医学術中国地区学会の獣医公衆衛生学会に参加、審査しましたのでその概要を報告します。獣医公衆衛生学会の発表演題数はコロナ禍から回復した四年振りの対面学会であったこともあり、例年通りに回復し28題でした。日本獣医師会からのオブザーバーの獣医公衆衛生学会副会長の猪島康雄教授（岐阜大学）は中部地区学会に比べ演題数の多さにびっくりしておられました。本年度の特徴としては例年に比較し大学からの演題が多く、山口大学共同獣医学部（4題）、広島修道大学（1題）、鳥取大学農学部共同獣医学科（1題）、倉敷芸術科学大学（1題）から7題発表されました。

島根県からは食肉衛生検査所と保健環境科学研究所から2題ずつ発表されました。地区学会長賞受賞講演には末尾の2演題が推薦されましたが、興味のある他県からの発表の概要を紹介します。「と畜場における牛の *Sarcocystis*（住肉胞子虫）の寄生状況」湯村優子ら（鳥取県食肉衛生検査所）では馬刺し中毒の原因となる *S. fayeri* と同一の毒性タンパク質の存在が報告されている *S. cruzi* が心室中隔47検体中35検体（74.5%）から検出され、*S. cruzi* の人に対する明確な病原性はいまだ不明な点が多く、牛肉の喫食には十分な加熱が必要であると報告されました。「岡山市内の施設に保護された猫の *Corynebacterium ulcerans* 保菌状況調査について」直原良子ら

（岡山市食肉衛生検査所）では保護猫5/179匹（2.8%）の自立可能な猫からDT産生 *C. ulcerans* が分離され、保菌猫が全国的に存在していることが指摘されました。「*Kudoa septempunctata* 以外の粘液胞子虫による有症事例の解析」石井圭子ら（広島県立総合技術研究所保健環境センター）

ではヒラメに寄生している *K.s* 以外の粘液胞子虫でも有症事例が報告されており、2018 年以降 *K.s* 以外の粘液胞子虫を検出した 4 例の事例があり非冷凍のカンパチ、ヨコワマグロなどの刺身が提供されていたが、いずれの例においても、食品と有症者便の両方から遺伝子が検出されたことがなく、検査結果の蓄積と粘液胞子虫の病原性の解析の必要性が指摘されました。

12 月 1 日～3 日の第 41 回年次大会に推薦された演題の要旨は以下のとおりです。

演題⑦犬における本邦初の NDM-5 カルバペネマーゼ産生大腸菌感染例 原田和記ら（鳥取大学農学部共同獣医学科獣医内科学教室）

カルバペネマーゼ産生腸内細菌科細菌（CPE）は最後に残された切り札とされるカルバペネム系薬に耐性を示す医療上きわめて重要な多剤耐性菌として日本を含む世界各国でその動向が注目されている。演者は獣医医療において本邦で初めて伴侶動物（犬）から NDM-5 カルバペネマーゼ産生大腸菌を分離し、当該菌へのカルバペネマーゼ遺伝子の由来を検討するとともに、One Health アプローチにより伴侶動物由来 CPE の動向に注視する必要性を指摘した。

演題⑩大学キャンパス内の野良猫数管理において奏功した事例 西本美晴ら（山口大学共同獣医学部獣医衛生学研究室）

大学キャンパス内で不特定多数によるエサやりにより 60 匹以上に増えた野良猫による糞便や悪臭苦情の改善のために立ち上がった山口大学共同獣医学部の学生数名による活動が発表された。活動に必要な費用はクラウドファンディングを含む寄付金とサークル費で賄い、2018 年にキャンパス内の野良猫の状況調査、TNR・地域猫活動に関する講習会など経て、2019 年から TNR（不妊手術は動物病院に依頼）を繰り返し 2022 年の子猫譲渡により、2023 年に野良猫は 34 匹（TNR 済 31 匹）と推移した。

6 第 4 1 回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和 5 年度）

令和 5 年 12 月 1 日（金）～3 日（日）、兵庫県神戸市の神戸国際会議場において、第 40 回日本獣医師会獣医学術学会年次大会が開催されました。本会からは 8 名の会員が参加しました。そのうち、原 知也会員（株式会社益田大動物診療所）が講演を行いました。

第 4 1 回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和 5 年度 神戸）概要

日本産業動物獣医学会地区学会幹事 長谷川清寿

令和 5 年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会（R5. 12. 1～3）が、神戸国際会議場（兵庫）で開催されました。

産業動物獣医学会では、各地区学会会長賞を受賞した 18 題の講演（牛関連 13 題、馬関連 1 題、豚関連 3 題、鶏関連 1 題）と獣医学術奨励賞受章者記念講演があり、中国地区での受賞演題 2 題が発表されました。その 2 題は、①広島県西部家畜保健衛生所の兼廣愛美会員の「鶏マイコプラズマ検査効率化の取組」、ならびに②株式会社益田大動物診療所の原 知也会員の「高蛋白高脂肪の代用乳による子牛の発育試験」です。最優秀賞にあたる獣医学術学会賞には、「高張食塩水が牛乳房炎原因菌のバイオフィルムに及ぼす影響」と題して発表の北海道農業共済組合の西航司会員が選考されました。獣医学術功労賞には、「生産者支援を目指した産業動物獣医療の高度化ならびに技術普及と人材育成」というテーマで酪農学園大学名誉教授の小岩政照先生が受賞されました。

さらに、一般講演で 17 題（牛関連 15 題、豚関連 1 題、その他 1 題）、研究報告で 15 題（牛関

連 11 題、馬関連 1 題、豚関連 1 題、鶏関連 2 題) の発表がありました。

このほか、産業動物獣医学会としてのシンポジウムが企画され、そのテーマは「牛の育種改良におけるゲノム情報の活用最前線」「高病原性鳥インフルエンザ：最近の流行と対策について」

「産業動物分野の遠隔診療技術向上に向けての現状と課題」「飼料価格の高騰と畜産農家への経営支援、今こそ生産獣医療の実践を！」というものでした。さらに、教育講演として「メタングラス低減と牛伝染性リンパ腫防除に関する最新知見」のテーマ設定がありました。当該学会の開催期間中にバラエティに富み、なおかつ最新情報を包含した多くの企画があり、参加した会員の多くが興味を持つテーマが設定された会場に都度集まり熱心に聴講、質疑応答がなされました。

開催されたシンポジウムの中から内容の概要をいくつか紹介しますと、まず「牛の育種改良におけるゲノム情報の活用最前線」では、全国的なゲノム育種価による能力予測とその活用が俯瞰的に述べられ、ゲノム情報からの遺伝的・不良形質の検出と防除（島根県 BAS1 の検出と防除の取組事例への良い評価を含む）、兵庫県での但馬牛におけるゲノム育種価等ゲノム情報の活用状況、そして、乳用牛へのゲノミック評価の活用事例の紹介があり、これらは今後のゲノム情報の利用に教唆を与えるものと思われました。

シンポジウム「産業動物分野の遠隔診療技術向上に向けての現状と課題」では、「V(獣医) to V」及び「F(農場) to V」の観点から総論的な講演（隠岐島での例も話題に）に加えて、様々な話題提供と活発で激しい討議がありました。これからデバイスの問題、システムの問題、連携の問題など様々な点で開発や解決を要するテーマであり、現状では発展途上で未成熟、しかしながら将来は発展的整備が必須になるであろうと実感しました。

シンポジウム「飼料価格の高騰と畜産農家への経営支援、今こそ生産獣医療の実践を！」では、きわめてタイムリーな話題ということで、会場は多くの会員で埋まりました。演題 2 の都城市の株式会社阿部商店高木久美子氏の「輸入粗飼料の現在の価格動向と今後の見通し」のなかで、「価格高騰に対する輸入粗飼料の選択」ということで、同商店の依頼コンサル担当でもある益田大動物診療所の加藤圭介会員が緑茶粕、アニュアルストロー、クレイングラス、オーチャードグラス、メドウヘイなどの飼料としての取り扱いのヒントについて実証を踏まえ情報提供し、興味を引いていました。乳牛の牛群健診の取組による事故低減の紹介、OPU-IVP 胚の高度利用による農家経営への貢献事例の紹介に関する報告と討論がなされました。獣医師の努力も一つであるが、やはりコスト管理できない農場は黒字にはならない、それを誘導していくことが大切ではないかという点では一致していました。

以上、令和 5 年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会における日本産業動物獣医学会の概要を紹介し、報告とします。

第 4 1 回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和 5 年度 神戸）概要

日本獣医公衆衛生学会地区学会幹事 福島 博

新型コロナウイルスの出現から 3 年半。ノーベル賞に輝く mRNA コロナワクチンの効果があったか、今年 5 月 8 日に新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に移行され、獣医学術学会年次大会が令和 5 年 12 月 1, 2, 3 日に神戸ポートピアの神戸国際会議場で 4 年振りに単独開催されることとなり、朝 7 時 32 分宍道乗車のやくも号⇒のぞみで新神戸へ、三宮で貝だしラーメンで腹ごしらえし、ポートライナー（10 分）で会場へ向かい、13 時から始まる日本獣医公衆衛生学会の教育講演

「オズウイルス (Oz virus, OZV) 感染症」(世界初の OZV 感染症の提示と発見に至った経緯) の会場へ滑り込む。

OZV は日本国内(愛媛県小津市)で採取されたタカサゴキラマダニから 2010 年初頭に分離され 2018 年に新規ウイルスとして報告されたが、動物での発症も人の感染例も確認されていなかった。2022 年に茨城県で 70 代女性が発熱・関節痛・倦怠感などを主訴に医療機関を受診し、入院 1 か月程度で突然に難治性の心室細動を生じ死亡した。茨城県衛生研究所で入院時の血液および尿が検索されたが SFTS と日本紅斑熱は陰性であったので、コロナ検査のために導入された次世代シーケンサー(NGS)(私のいた頃にはなかった新兵器)によるゲノム解析と国立感染症研提供の MePIC パイプライン(Metagenomic Pathogen Identification pipeline for Clinical specimen)により、OZV の遺伝子断片の配列が検出された(獣医師の研究員が担当)。さらに衛研で行われた組織培養の上清の感染症での追加検査で OZV の電顕像と全長ゲノムが同定された。OZV 遺伝子の分布は心筋に有意に多く、心筋炎が主たる病態で死に至るものと診断された。これで、ダニは SFTS、ダニ媒介性脳炎、OZV の 3 種類の病原ウイルスを媒介することが明らかになったが、ダニからは未曾有の正体不明のウイルスが分離されていることも紹介された。地方衛研にコロナ検査体制強化に導入された NGS により未知の病原体を地方衛研でも速やかに同定できる時代が到来したことを示唆し、地衛研での NGS を用いた調査研究の進展を期待するところです。

公衆衛生部門の 3 賞のうち獣医学術奨励賞(獣医師会雑誌に掲載された最優秀論文))は動物介在療法による不登校児童生徒への支援 松澤淑美(長野県動物愛護センター)、獣医学術功労賞はカンピロバクター食中毒の防除に関する研究 三沢尚明(鹿児島大学)が受賞されました。獣医学術学会賞は地区学会賞受賞講演を審査し選考されます。今年の演題数はコロナ下(コロナの状況下)のためかこれまでで最も少ない下記の 9 演題でした。

- 1:愛媛県肥育ブタにおける抗日本脳炎ウイルス抗体調査ならびにウイルス分離株の遺伝子解析
- 2:栃木県内で検出された胃腸炎ウイルスの分子疫学解析
- 3:電子申請システムを活用した食中毒調査手法の検討について
- 4:小学生だってできる! HACCP の考え方を取り入れた衛生管理の導入
- 5:宮城県における食品からの *Escherichia albertii* 検出状況
- 6:規制の対象外となっている狩猟用鉛弾に起因するオジロワシの鉛中毒症事例
- 7:九州地方におけるカルバペネマーゼ産生菌の薬剤耐性状況および保有薬剤耐性遺伝子に関する調査
- 8:大学キャンパス内の野良猫数管理において奏功した事例
- 9:犬における本邦初の NDM-5 カルバペネマーゼ産生大腸菌感染症事例

獣医公衆衛生部門の獣医学術学会賞には No.3 浅沼貴文ら(静岡市保健福祉長寿局保健衛生医療部保健所食品衛生課)のアイデア溢れる演題が選考されました(最近の選考理由にはアイデア!! が重視される傾向にあります)。静岡市が導入する「LoGo フォーム」という既存の電子申請システムに食中毒調査用の入力フォームを作成し、食中毒事例(患者 4 名)において当該入力フォームを用いて調査した。患者には入力フォームの URL をショートメールで送付し回答を得た。得られた回答は表計算ソフトにコピー&ペーストして集計した。今回は 4 人という小規模事例であったが、電子申請方式は大規模事件でより大きな効果が期待される……

公衆衛生のシンポジウムは①知っておきたい海産魚介類の自然毒による食中毒 ②近年注目す

べき寄生虫性食中毒 ③次なるパンデミックの発生に備えて ④わたしたちの身近にせまる感染症—ワンヘルスの視点から新たな感染症と再流行する感染症を考える—などが企画された。一時代前の腸炎ビブリオやサルモネラ・エンテリティディス、EHEC O157 感染症・食中毒への対応による食品衛生の向上さらにコロナ下での細菌・ウイルス性感染症や食中毒の減少またジビエの普及などを反映し、今大会では自然毒や寄生虫性食中毒にスポットライトが当てられました。興味を引いた 2, 3 の演題を紹介します。①大阪湾に生息する二枚貝における麻痺性貝毒による毒化について：大阪湾では地球温暖化による大阪湾の海水温の上昇により 2002 年以降にプランクトン（有毒渦鞭毛藻 *A. catenella*）の増殖によりアサリ、トリガイ、ヤマトシジミに麻痺性貝毒の蓄積が確認され、2000 年以降に発生した中毒事例のほとんどが大阪湾とその周辺海域における事例であり、大阪湾における貝毒におけるリスク管理、原因プランクトンモニタリング体制などについて報告があった。②フグ毒による食中毒とフグの毒化メカニズム：フグが保有するフグ毒テトロドロキシン（TTX）はプラナリアに比較的近縁な生物群のオオツノヒラムシが極めて高濃度の TTX を保有し、クサフグがオオツノヒラムシとその卵を摂餌し毒化する。また、クサフグは高濃度の TTX が蓄積されたヒガンフグの卵を摂餌し毒化する。トラフグ稚魚もヒガンフグの卵を摂餌し毒化し、取り込んだ TTX を皮膚と肝臓に局在させた。2010 年頃からヨーロッパを中心に二枚貝類から TTX の検出が報告され、2017 年にはホタテ貝、最近では三陸沖のアカザラガイから TTX が検出され、アカザラガイの TTX による毒化はオオツノヒラムシの幼生を吸入してしまったことによることが示唆された。今後、地球温暖化の進行によりオオツノヒラムシの分布域が高緯度帯に広がることで予期せぬ生物の TTX による毒化が起こることが予想される。最後に③アニサキス。昔、流行したサルモネラ、腸炎ビブリオ、大腸菌などによる食中毒はここ数年ほとんど報告されず、カンピロバクターとノロウイルスによる食中毒も減少傾向にあるなか、2013 年にアニサキスを原因とする食中毒が食中毒集計に個別集計されるようになり、事例数の報告は年々増加し 2022 年には全国で 570 件に達し、食中毒原因物質の一等賞となっている。国内のアニサキス症（食中毒とまらない有症例も含む、保健所に届けられて食中毒となる）の原因食品はサバが最多でその多く（80%）はシメサバが原因であった。私はシメサバを作ることを特技としているが、昨年、パートナーが激しい胃腸炎を起こし内視鏡で除去してもらったが、HC に届けていないことから、全国ではもっと多くの患者が発生していると想像される。アニサキスの予防には 24 時間以上の冷凍処理または加熱処理が有効です。

地球温暖化によりフグをはじめサバ、サンマなども漁場が北上し、最近ではスーパーに行ってもサバの姿を見かけなくなりシメサバも作られなくなりましたが、食中毒事情も地球温暖化に影響され変遷しているようです。

7 令和 6 年度島根県獣医学会

獣医師会事務局

令和 6 年度の県獣医学会を 8 月 18 日（日）出雲市塩冶有原町「出雲市民会館」301 会議室において開催しました。

本年度の発表演題数は、産業動物部門 9 題、小動物部門 6 題、獣医公衆衛生部門 6 題の合計 21 題でした。

また、市民公開講座として、岡山理科大学獣医学部獣医保健看護学科 准教授 佐伯香織先生に、「愛玩動物看護師の仕事～知識・技術をアップデートする～」と題してご講演をお願いしました。

なお、発表終了後、選考委員会において、学会長賞及び知事賞の選考並びに10月19日・20日の両日、松江市において開催される令和6年度獣医学術中国地区学会への県代表の選考が行われました。

発 表 演 題 （21題）

- 1 地域猫活動事業における猫の行動範囲把握の試み
月森綾子（島根県県央保健所）
- 2 豚赤痢分離培地の比較検討
風見裕太（島根県食肉衛生検査所）
- 3 分子疫学解析による患者由来 *Campylobacter jejuni* の感染源の推定
林 宏樹（島根県保健環境科学研究所）
- 4 稲 WCS 多給農家で見られた食餌性ケトosis
齋藤英利香（島根県農業共済組合家畜臨床技術センター）
- 5 島根県内で分離された *Mycoplasma bovis* の薬剤感受性調査と分子系統樹解析
鈴木郁也（島根県家畜病性鑑定室）
- 6 島根県内で飼養されているヤギの消化管内寄生虫卵保有状況と FECRT による駆虫薬耐性調査
板井恵子（島根県農業共済組合雲南家畜診療所）
- 7 山羊の急性肝蛭症
金丸和之（島根県西部農林水産振興センター川本家畜衛生部）
- 8 島根県内で検出されたバンコマイシン耐性腸球菌の分子疫学解析
川上優太（島根県保健環境科学研究所）
- 9 *Kudoa iwatai* の関与が疑われた食中毒とその予防啓発
井上佳奈（松江市・島根県共同設置松江保健所）
- 10 若年層を対象とした食肉による食中毒予防の取り組みについて
豊田紗彩（島根県益田保健所）
- 11 両側の橈骨尺骨骨折に REGENEBONE® を施し治癒したトイプードルの一症例
白濱 潤（出雲ペットクリニック・島根県）
- 12 コーンビーム CT によって生前診断された気管狭窄の若齢ヨツユビハリネズミの1例
毛利 崇（もうり動物病院・島根県）
- 13 重症熱性血小板減少症候群(SFTS)に猫から感染
松本泰和（益田ペットクリニック・島根県）
- 14 診断に苦慮した左右対称性脱毛の猫の1例
野中雄一（のなか動物病院・島根県）
- 15 上眼瞼に発生した平滑筋肉腫のウサギの1例
塚根悦子（アスリー動物病院・島根県）
- 16 鼻鏡切除を行なった鼻鏡神経鞘腫の猫の1例
毛利 崇（もうり動物病院・島根県）
- 17 膝蓋骨外方脱臼に対し大腿骨滑車外側稜増高により整復した交雑種雌牛1例
澤松祐人（株式会社益田大動物診療所・島根県）
- 18 水酸化カルシウムを用いた牛趾皮膚炎に対する予防と治療効果の検討
高橋海秀（株式会社益田大動物診療所・島根県）

- 19 分娩日と授精日に限定した簡易的台帳作成により繁殖成績が改善した1酪農場
板井恵子（島根県農業共済組合雲南家畜診療所）
- 20 黒毛和種肥育牛のコクシジウム症に対する牛コロナウイルスワクチンの効果
下場 仁（株式会社益田大動物診療所・島根県）
- 21 黒毛和種繁殖雌牛における緑茶粕調整サイレージの給与効果
加藤圭介（株式会社益田大動物診療所・島根県）
-

選 考 結 果

【 県知事賞（最優秀賞） 】

小動物部門 受賞者：松本泰和 （益田ペットクリニック）
重症熱性血小板減少症候群(SFTS)に猫から感染

【 優秀賞 】

産業動物部門 受賞者：加藤圭介 （株式会社益田大動物診療所）
黒毛和種繁殖雌牛における緑茶粕調整サイレージの給与効果

公衆衛生部門 受賞者：林 宏樹 （島根県保健環境科学研究所）
分子疫学解析による患者由来 *Campylobacter jejuni* の感染源の推定

令和6年度獣医学術中国地区学会 県代表演題

<u>産業動物部門</u>	4. 5. 6. 7. 17. 18. 20. 21
<u>小動物部門</u>	11. 13. 14. 15
<u>獣医公衆衛生部門</u>	1. 2. 3. 8. 9. 10

8 令和6年度獣医学術中国地区学会

令和6年10月19日(土)～20日(日)、島根県松江市の松江テルサにおいて、令和6年度獣医学術中国地区学会が開催されました。113題（産業動物部門33題、小動物部門54題、獣医公衆衛生部門26題）の発表がありました。本県の加藤圭介会員、林 宏樹氏の2名が学会長賞を受賞されました。

◎学会長賞（島根県の受賞者）

○日本産業動物獣医学会（中国地区）

受賞者 加藤圭介（株式会社益田大動物診療所）

演 題「黒毛和種繁殖雌牛における緑茶粕調整サイレージの給与効果」

○日本獣医公衆衛生学会（中国地区）

受賞者 林 宏樹（島根県保健環境科学研究所）

演 題「分子疫学解析による患者由来 *Campylobacter jejuni* の感染源の推定」

9 第42回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和6年度）

令和7年1月24日（金）～26日（日）、宮城県仙台市の仙台国際センターにおいて、第42回日本獣医師会獣医学術学会年次大会が開催されました。本県からは6名が参加しました。そのうち、加藤圭介会員（（株）益田大動物診療所）、林 宏樹氏（島根県保健環境科学研究所）の2名が講演を行いました。

第42回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和6年度 仙台）概要

日本産業動物獣医学会地区学会幹事 長谷川清寿

令和6年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会（R7.1.24～26）が、仙台国際センター（宮城）で開催されました。真冬の時期、仙台市の屋外の寒さは松江市とほぼ同等ですが、カラッとして引き締まった気候を感じました。

産業動物獣医学会では、各地区学会会長賞を受賞した17題の講演（牛関連11題、馬関連2題、豚関連2題、鶏関連1題、その他1題）と獣医学術奨励賞受章者記念講演があり、中国地区での受賞演題2題が発表されました。その2題は、①株式会社益田大動物診療所の加藤圭介会員の「黒毛和種繁殖雌牛における緑茶粕調整サイレージの給与効果」、ならびに②岡山家畜保健衛生所の菱川創太会員の「同一地域4戸で同時期に発生した牛ボツリヌス症」です。最優秀賞にあたる獣医学術学会賞には、「黒毛和種子牛の呼吸器病における初診時の胸部超音波検査によるスコア化と呼吸器症状および発育との関連」と題して発表の鹿児島県農業共済組合曾於家畜診療センターの叶有斗会員が選考されました。獣医学術功労賞には、「黒毛和種牛における代謝性疾患の防除に関する研究」というテーマで宮崎大学名誉教授の片本宏先生が受賞されました。



そして、一般口演で28題（牛関連25題、豚関連1題、鶏関連1題、その他1題）、研究報告で14題（牛関連12題、馬関連1題、豚関連1題）の発表がありました。

このほか、日本獣医学会、産業動物獣医学会として、産業動物に焦点をあてたシンポジウムが企画され、そのテーマは「防疫対策としての鳥インフルエンザワクチンの開発・使用の現状」

「牛ウイルス性下痢（BVD）の課題と対策」「ヒトと農業のための野生動物制御を考える！」「豚熱対策の現状と課題」「牛の遺伝的・不良形質の制御に関する最近の話題」「農場管理獣医師の役割と認定獣医師制度」「SKLVセンターの役割と展望：産業動物の参加型臨床実習と家畜衛生向上のための教育・研究の実践」「産業動物現場における遠隔診療の現状と課題」というものでした。さらに、教育講演として「牛における画像診断の現状と将来」「乳牛の子宮疾患」「乳牛における妊娠率の向上対策と最近のトピックス」のテーマ設定がありました。本年の学会も、昨年

にも増して盛りだくさん、かつ最新情報を包含した多くの企画があり、参加した会員は、興味を持つテーマが設定された会場に参集し、熱心に聴講、質疑応答がなされました。

開催されたシンポジウムの中から内容の概要をいくつか紹介しますと、まず「防疫対策としての鳥インフルエンザワクチンの開発・使用の現状」では、世界的な状況と国内での状況がプレゼンされ、昨今の多発状況もあり、国内での予防的ワクチン使用はできない状況ではあるものの、ワクチン接種鶏と感染鶏の区別が PCR 検査で区分可能であること、全体的に緊急接種を要するような非常事態を想定した準備（有効なワクチンの効果的備蓄）に対する関心は高いことが感じられました。

シンポジウム「牛の遺伝的不良形質の制御に関する最近の話題」では、当県も参画している和牛ゲノムデータベース（DB）を起点とした遺伝的不良形質の候補変異の検証系の構築について、これまでは臨床データから DB を参照して遺伝的不良形質を特定する流れが主でしたが、これからは DB から候補変異をピックアップして臨床症状を確認していく流れも加わる方向性が紹介されました。また、新たな遺伝的不良形質として、和牛で 1 形質、乳牛で 2 形質が紹介されるとともに、これらの形質について、シンポジストから臨床獣医師に向けて、追加症例の情報提供が要望されました。



以上、令和 6 年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会における日本産業動物獣医学会の概要を紹介し、報告とします。

第 4 2 回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和 6 年度 仙台）概要

日本小動物獣医学会地区学会幹事 黒田 治

これまで何度か仙台旅行に行きましたが、冬の仙台は今回が初めてでした。東北のイメージから、雪が多く寒いだろうと勝手に思い込んでいましたが、街に雪は全く無くちょっと呆気にとられました。タクシーの運転手さんに聞くと、いつも積雪は 3～4 cm 程度とのこと。太平洋側って東北であっても雪が少ないことを知りました。夜は美味しい牛タンとビールを満喫、やはり仙台で食べる牛タン焼は格別でした。

さて、今回の年次大会の発表で印象に残ったのは、慢性炎症性腸症の治療および治療に対する効果の評価方法の発表で、食欲及び排便回数や便の性状等いくつかの評価項目を、正常：0 点、軽度：1 点、中等度：2 点、重度 3 点と症状を数値化することで、治療前と治療後の状態を客観的に比較し治療効果を評価するというものでした。症例を用いた具体的な説明は説得力があり、今後の臨床に活かしたいと思いました。

また、乳腺腫瘍の手術方法に関する発表も興味深かったです。犬と猫の未避妊と避妊済の乳腺形態の CT 画像から見えてくる違いや乳腺腫瘍および乳癌の発生率について、未避妊では乳腺腫瘍の発生率は高いが、避妊済に比べ乳癌の発生率は低いという報告がありました。手術の説明では、乳腺腫瘍の発生部位により切除範囲の選択方法や縫合方法など、わかりやすく説明されました。

今回参加して、小動物学会の参加者は産業動物と公衆衛生に比べ明らかに少なく感じました。展示会場の出展企業も少数で、あまり活気を感じられず、寂しい印象を受けました。

来年は、31年ぶりに日本（東京）で行われる世界大会との同時開催、幅広い分野の研究に触れることができると思いますので、是非皆さんで参加しましょう。

第42回日本獣医師会獣医学術学会年次大会（令和6年度 仙台）より

～One Health Approach～

日本獣医公衆衛生学会地区学会幹事 田原研司

令和7年1月24日から26日に開催された標記大会に出席して参りました。年次大会の大きな特徴のひとつに三学会（日本小動物獣医学会・日本産業動物獣医学会・日本獣医公衆衛生学会）ごと又は共同して専門的な最新トピックをテーマにしたシンポジウムや教育講演等が多数企画されます。各種専門家たちの最新知見を複数聴講できる機会がこの年次大会の最大のベネフィットと言えます。

私、以前（平成26年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会・岡山大会）ワンヘルスに関する公益社団法人日本医師会との連携シンポジウムで講演した経験がありますが、ワンヘルスは現在も公益社団法人日本獣医師会の一番「推し」のテーマではないでしょうか？また、私、公益社団法人日本獣医師会が主宰するワンヘルス推進検討委員会の委員を務めていることもあり、今大会で企画されたワンヘルスに関する複数のシンポジウムや教育講演等を中心に聴講しましたので、私見を添えてその一部をご紹介します。

ワンヘルスは、大きく3つの柱「人の健康（・福祉）」「動物の健康（・福祉）」「環境の保全（・保護）」の互惠関係にあります。私たち獣医師の業としての獣医療ならびに関連する産業動物・公衆衛生等の仕事や普段の日常生活等々が、まさにワンヘルスの実践（One Health Approach）そのものと考えます。もちろん、獣医師のみでワンヘルスの全てを体現することはできませんが、今大会では全国の獣医師たちが3つの柱でそれぞれに主役あるいは脇役として実践（One Health Approach）されているテーマのシンポジウムや教育講演、市民公開講座等が多数企画されました。

1. 「人の健康・福祉」と「動物（犬）」

市民公開講座のひとつに「犬との共生が人にもたらす健康効果」と題して、3人の専門家が講演されました。犬を飼育することによるヒトの加（老）齢フレイルや認知症の予防、加え健康寿命（又は65歳時の健康余命）の延伸等について、日本や世界各国のデータを示すだけでなく、その要因分析を医学的・獣医学的な検証結果と併せて紹介されました。さらにはCAPP（Companion Animal Partnership Program）活動、所謂、動物介在療法としてヒトの医療へも盛んに応用されており、これらの犬の健康管理や獣医療、しつけ方、愛護、様々な活動等における獣医師の知・技・業がとても重要なOne Health Approachとなっています。

島根県内においても、沢山の獣医師やボランティア、動物愛護団体等の方々による上述と同様のOne Health Approachが進められていることを記します。

2. 「環境の保全・保護」と「動物（家畜）他」

シンポジウム「食の安全とSDGs」と題して、4人の専門家が講演されました。現在、地球規模で温暖化（沸騰化）が進む中で脱炭素対策を世界規模で推進する時にあり、各種の産業から排出され

る二酸化炭素を削減する取り組みが獣医師を取巻く業界においても重要な One Health Approach となっています。まずは、畜産分野における温室効果ガス排出削減対策としてのみどり認定やJ-クレジットの取り組みが畜産振興と並行して推進されています。また、わが国の食糧需給率は極端に低いこともあり、海外からの農畜水産物が船や飛行機等で輸入される実態が二酸化炭素の排出に大きく関わるだけでなく、食品の賞味期限の延伸等によるフードロス（食品廃棄）の低減が不可欠です。これらに関わる各種業界の企業や団体の努力のみに頼るのではなく、国や地方公共団体も様々な規制・基準を設定して推進すべきかとも考えます。

わが国には、大気汚染防止法や水質汚濁防止法、土壌汚染対策法、廃棄物処理法、リサイクル法等々、環境を守る各種法が人々の生活する土台（基盤）となっております。地球温暖化対策は、決してわが国のみの取組では解決しませんが、まずは我々獣医師が携わる業界から One Health Approach を推進して参りましょう。

3. 「感染症対策」

教育講演「下水疫学による感染症流行把握」と題して、2人の専門家が講演されました。2020年に始まった新型コロナウイルス感染症パンデミックのように、ひとたびヒトから人への感染能力を得た際のその脅威を私たち人類は身をもって経験できたはずですが、地球上には、新型コロナウイルス以外にも動物を Source（起源）としてヒトのパンデミックを起こす可能性のある病原体がまだまだ沢山存在しています。世界中の医学・獣医学・微生物学・疫学・保健学等々、沢山の研究者たちがその知見（Evidence）をもって警鐘と啓発を繰り返し行っています。加えて、公益社団法人日本獣医師会が動物由来感染症対策を主とした One Health 推進の世界における先導者となっております。

この度の教育講演は、すでにヒトから人へ定期的に流行を繰り返す感染症について、その流行を少しでも早く把握して、その波の規模（患者数）を少なくするための研究成果が報告されました。元は動物由来や食品・土壌・水系等の環境由来の病原体が定期的に広く人の中で流行を繰り返す感染症は多数存在しています。その病原体を撲滅（又は制圧）すること自体が既に不可能であれば、感染症の流行が大きくなる前に把握し、各種対策に繋げることが重要となります。そのサーベイランスの手法として、ヒトの胃や腸管でも増殖し得る病原体、例えば季節性インフルエンザウイルスや新型コロナウイルス、エンテロウイルスやアデノウイルス、ノロウイルスなどの腸管系ウイルス、サルモネラやカンピロバクターなどの細菌類など、下水道からそれぞれの流行期に沢山の量の病原体を検出する研究が実用化に至ったそうです。今から約 15 年も前になりますが、私が島根県保健環境科学研究所に在籍していた頃は、患者からの臨床検体から病原体を分離・検出する手法のみでしたので、流行から少し遅れての状況把握でした。まして、近年はヒトの臨床検体の収集が難しくなりましたので、当時から細々と始まっていた下水道へのアプローチ研究が実践できるまでに発展したことはとても喜ばしい限りです。新たなヒトに対して大きな脅威となる動物や植物、土壌、環境由来の様々な感染症の実態を把握する感染症対策以外にも、現在のヒト・ヒト間で定期的に流行を繰り返す感染症の制御にむけたサーベイランス研究も重要な感染症対策における One Health Approach と考えます。

4. 「自然災害における危機管理」

シンポジウム「令和 6 年能登半島地震に係る動物救護対策と全国各地における災害対策への取組み」と題して、4人の専門家が講演されました。近年のわが国では、1995 年阪神淡路大震災、2004 年新潟中越地震、2011 年東日本大震災、2016 年熊本地震、2024 年能登半島地震と極めて甚大な地

震災が発生しました。また、異常気象がもたらす豪雨災害が毎年全国の何処かで発生しています。そのような中、災害が起こる度に事前の備えがとても重要なことは理解出来てはいますが、その想定之難しさと備えのあり方に国や都道府県、市町村は苦慮されているのが実際ではないでしょうか。私、2016年の熊本地震と2024年能登半島地震及び2018年の広島県（坂町）豪雨災害時に保健活動の一員として現地へ派遣された経験があります。2011年の東日本大震災では、私の多くの友人・知人が被災し、その悲惨な現状を教えてくださいました。いずれの災害も想定を超えるもので、その被害たるや想像に絶するものがありました。発災直後は、命の救護・救命・災害医療を最優先し、その後間髪入れずに一次避難所の整備（水、食事、トイレ、暖房、冷房、プライバシー確保等のQOL維持）、二次避難の整備、種々支援（ボランティア・物資）の受け入れ、保健・二次医療活動、道路・電気・ガス・上下水道等インフラ復旧、災害廃棄物処理、,,,,。とにかく、すべてがごった返す中での災害時における危機管理の難しさを、私が過去に派遣された熊本市役所、石川県能登町役場、広島県坂町役場のガバナンス部署だけでなく、避難所や被災地域への活動等を通して、つぶさに見聞し、体感して参りました。このシンポジウムでは、大規模地震災害時における動物救護のあり方を各専門家が講演されましたが、共通してヒトの災害対策と密接な連携を必要とすること。特に、犬や猫のペット動物も、牛や豚、鶏の家畜動物もヒトの避難と切り離せない生活環境の実態を考慮しつつ、どのような保護（救護）と避難、そして飼育・飼養ができるのか全国の自治体が作成する地域防災計画に十分な想定を基に明記できているか今一度精査すべきと理解しました（絵に描いた餅になっていないでしょうか？）。東日本大震災の数年後に野生化したペット動物たちや、餓死した家畜たちのマスコミ映像は、ショッキングでとても悲しく、残念でした。今、One Health Approachを考えたときに、いつどこで起こるかわからない大規模な自然災害に対して、ヒトと動物の互恵が担保される災害対応（準備）計画を再度構築していく必要性を感じます。

最後に、私は、この大会の全ての講演・発表・報告は、One Healthに繋がる源（Source）と考えます。今回ご紹介したトピックは僅かですが、全国の獣医師たちがとてもキラキラ輝いていると感じる3日間でした。

令和6年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会（仙台）に派遣頂きました「公益社団法人島根県獣医師会」に深謝いたします。

第 12 回全国和牛能力共進会鹿児島大会での“チーム島根”の大活躍と 次回北海道大会に向けて

畜産技術センター所長 長谷川清寿

第 12 回全国和牛能力共進会が令和 4 年 10 月 6 日から 10 日の 5 日間にわたり、鹿児島県霧島市で「種牛の部」、南九州市で「肉牛の部」が“和牛新時代 地域かがやく和牛力”をテーマに開催されました。北は北海道、南は沖縄県から 41 道府県からの参加で、その盛り上がりが実感されました。

島根県としては、すべての出品区にエントリーし、種牛の部（生体審査 1～6 区）では 5 区を除いた出品区で前回大会（平成 29 年、宮城）を上回る順位を獲得し、新設の特別区（農大・農高）では出雲農林高校が 5 位と顔品賞を受賞するなど健闘しました。この出雲農林高校の受賞から一気に“チーム島根”として団結感が増し、出品関係者の笑顔がみるみる増えたように感じました。そして、特筆すべきは、肉牛の部（枝肉審査 6～8 区）で 1 位（うち 1 頭が脂質賞を受賞）、2 位、2 位となり、総合評価（6 区）で 3 位を獲得したことです。”しまね和牛”の評価を一気に全国トップレベルに高める快挙でした。出品ならびに関係された皆様方のご尽力に敬意を表しますとともに、心より感謝申し上げます。

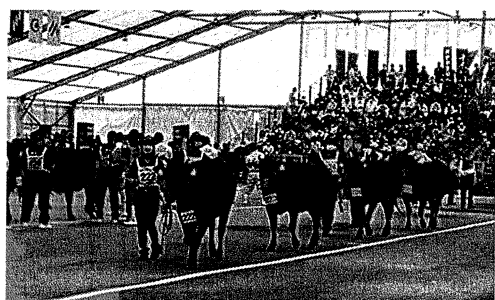
そして、このような華々しい成果は一日にして成されたことではなく、これまで結果として苦汁をなめてきた先達のご努力の積み重ねがあつてのこととの思いを馳せ、改めて敬意を表す次第です。

また、多くの産業動物獣医師がその支えとなっていたことも忘れてはならないと思います。特に、現地帯同で診療等の担当をいただいた NOSAI 雲南家畜診療所の内田博道先生、出品牛生産段階で受精卵移植を精力的に行っていたいただいた故安部茂樹先生のご功績はとても大きいものでありました。

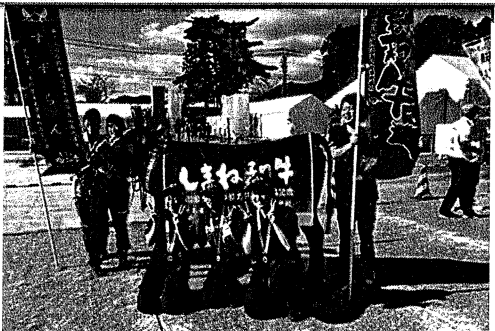
次回、北海道大会に向けての出品取組は、さらなるステップアップが期待されることとなります。生産者、関係者の意欲を最大限反映できるような体制づくりに挑んでいく方向です。

（「2023 年 2 月 21 日寄稿」）

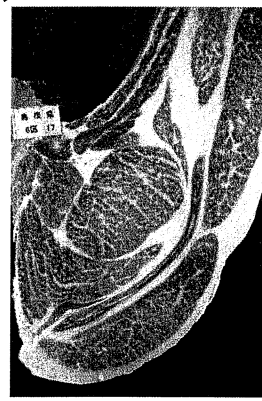
※第 12 回全国和牛能力共進会 島根県代表牛の出品のようすと枝肉断面(抜粋)



種牛の部 総合評価 6 区 奥出雲町



種牛の部 農大・高校特別区 出雲農林高校

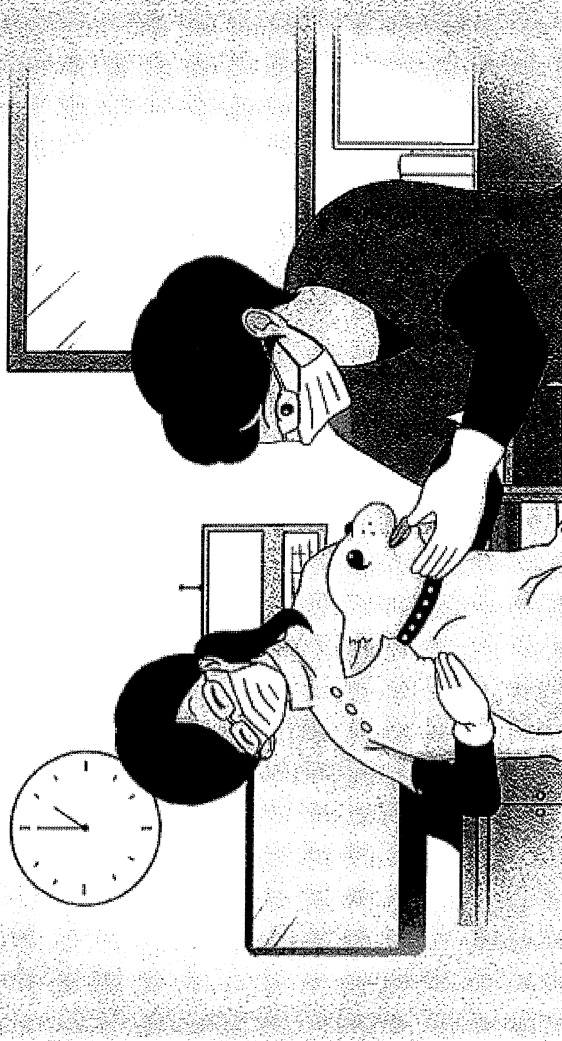


肉牛の部
総合評価 6 区
(有)藤増牧場
(左上、右上)
JA 吉田肥育 C
(左下)

獣医療関係者の感染防御対策にご理解ください

(手袋・マスク等)

動物から人に感染する病気があります。獣医療関係者は動物の処置を行う時に、このような病気から身を守るために、個人防護具(PPE)を着用する必要があります。



動物から人に感染する病気の例

- ◆ 重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)
ウイルスを保有しているダニに咬まれると感染します。また、人はSFTSに感染した犬や猫からも体液等を介して感染することが報告されています。
- ◆ パスツレラ症、猫ひっかき病、カブノサイトファーマーガ感染症、エキノコックス症、ブルセラ症等



個人防護具 (Personal Protective Equipment, PPE) とは

- 動物の血液、体液、分泌物、排泄物に感染性物質が存在することがあります。獣医療関係者の皮膚を守り、衣類の汚れを防ぐために、白衣やガウン、エプロン等を着用します。
- 血液や体液、粘膜、傷のある皮膚等に触れる際は、手袋を着用します。
- 血液等のしぶきが発生する可能性がある処置をする場合は、目、鼻、口の粘膜を守るために、マスク、ゴーグル、フェイスシールドを着用します。



動物由来感染症の詳しい情報については、厚生労働省ホームページをご覧ください。

動物由来感染症 厚生労働省 検索



厚生労働省

健康所長 獣医関係



いのちをつめる。いのちを守る。
公益社団法人 日本獣医師会

EU向け牛肉輸出に関する対応

肉用牛農家を診療する獣医師のみなさまへのお願い

EU向け牛肉輸出に当たって輸出先国より要求される対応については、主に輸出を行う肥育農家や輸出事業者でご対応いただいているところです。

今般、EU当局からの要求に伴い、EU向け牛肉輸出に当たっては、その由来となる家畜に対して、EUで使用が禁止されている動物用医薬品（詳細は裏面参照。国内流通する医薬品ではホスホマイシン※、エストラジオールの成分を含む製剤が該当）を生涯一度も使用していないことを確認した上で輸出する体制を整備することとなりました。

EU使用禁止薬剤のうち国内で発情誘起等の目的で用いられるエストラジオールについては、獣医師により投与されるケースが多く、使用記録を農家で確認できないケースが想定されます。

このため、EUにおける使用禁止薬剤の使用歴の確認に当たって肥育農家や繁殖農家から獣医師のみなさまに、合意書や照会の対応を求められる場合がありますので、御協力をお願いいたします。

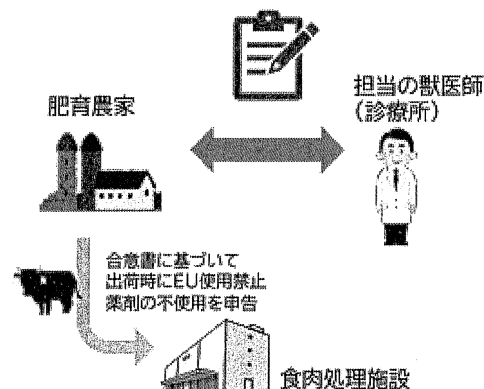
※ホスホマイシンは2026年9月3日以降にEUに通関する牛肉由来の牛に適用開始

1. 肥育農家から求められるケース

肥育農家においてはEU使用禁止薬剤の使用機会が基本的でないものと考えられます。このため、個体単位の確認ではなく、農場全体でEU使用禁止薬剤を使用しないことについて肥育農家、獣医師（診療所）連名で合意書を作成し、その書面を農家において保存いただくことで当該農場における不使用記録とみなし、肥育農家は合意書に基づいてEU使用禁止薬剤不使用申告書を提出することとなります。

肥育農家から求めがあった場合には内容を確認の上、合意書への署名に御協力をお願いします。（変更がない場合を除き、更新不要です）

EU使用禁止薬剤不使用の合意書



（注）複数の獣医師が関わる場合、農家は複数の獣医師と合意書を作成することとしています

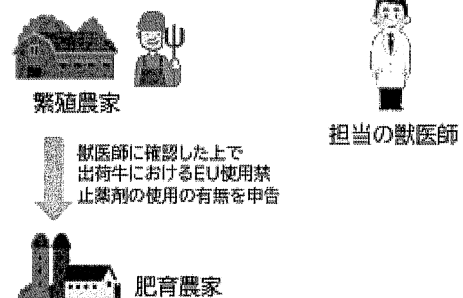
2. 繁殖農家から求められるケース

経産牛を肥育し牛肉輸出する場合は、肥育素牛の導入元となる繁殖農家でEU使用禁止薬剤（主にエストラジオール）が使用されている可能性があります。このため、繁殖農家は出荷先の経産牛肥育農家に対して、個体単位でEU使用禁止薬剤の使用状況を申告する必要が生じることとなります。

これに当たり、繁殖農家からEU使用禁止薬剤の使用有無について照会があった場合は、回答への御協力をお願いします。（書面への署名等の必要はありません）

Q この牛にEU使用禁止薬剤は使用したことはありますか

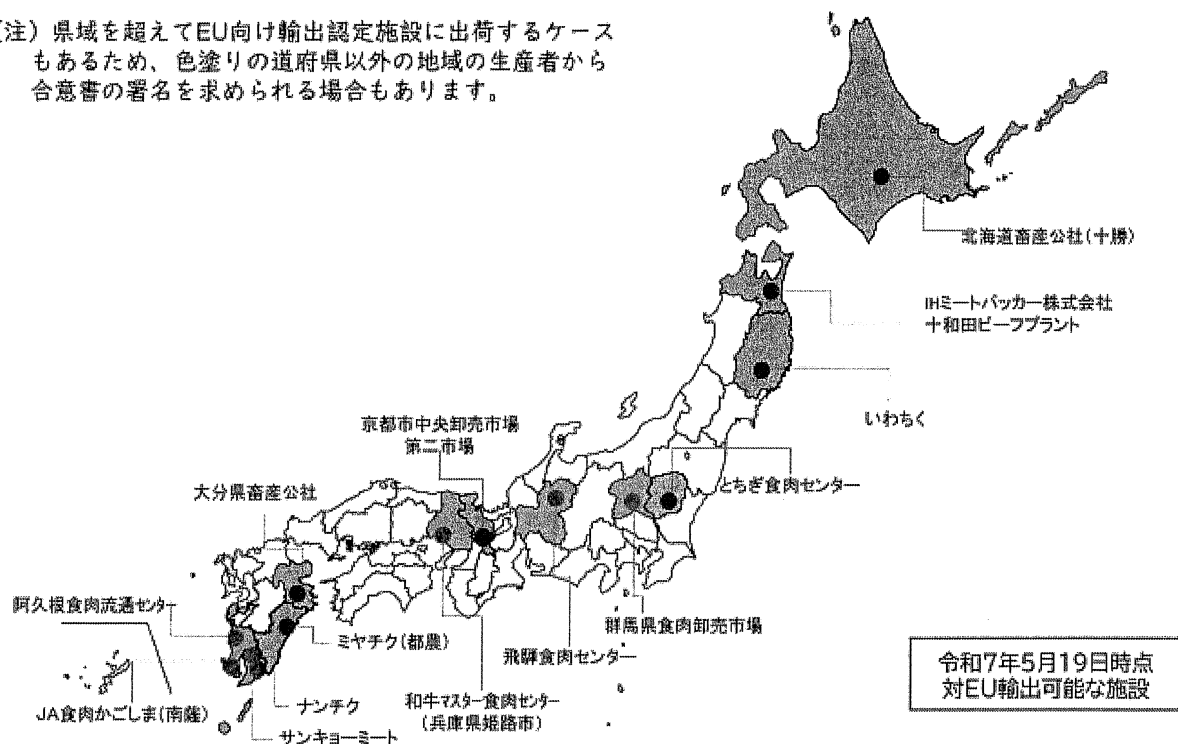
A 診療簿によると使用歴はないです



（注）肥育農家と上記1の合意書を作成していない場合は肥育農家から照会がくる可能性もあります

EU向け輸出認定施設に出荷している肥育農家から合意書の署名を求められる可能性があります

(注) 県域を超えてEU向け輸出認定施設に出荷するケースもあるため、色塗りの道府県以外の地域の生産者から合意書の署名を求められる場合もあります。



EUにおいて使用が禁止されている動物用医薬品リスト (牛用抜粋)



成分	国内の承認薬剤の有無
ホスホマイシン	あり (ホスホマイシン(注射、飼料添加))
スチルベン類	なし (使用禁止*(ジエチルスチルベストール))
抗甲状腺薬	なし
エストラジオール17β(類似物質含む)	あり (エストラジオール安息香酸エステル(注射、腔内留置))
アリストロキア属及びその調製物	なし
クロラムフェニコール	なし (使用禁止)
クロルプロマジン	なし (使用禁止)
コルヒチン	なし
ダブソン	なし
ジメトリダゾール	なし (使用禁止)
メトロニダゾール	なし (使用禁止)
ニトロフラン(フラソリドンを含む)	なし (使用禁止)
ロニダゾール	なし (使用禁止)

* 日本国内においても獣医師を含め牛に対して使用禁止

(問い合わせ先)

農林水産省消費・安全局畜産安全管理課生産安全班 TEL:03-6744-2104

支 部 活 動

出雲支部 令和 6 年度活動報告

出雲支部事務局 廣江朋子

出雲支部は県内で最も会員数の多い支部です。令和 7 年度には新規会員 2 名を迎え、会員 60 名で支部を盛り上げていきたいと思ひます。以下、令和 6 年度の活動を紹介しします。

5 月 22 日に、支部総会を開催しました。出席者は 18 名（委任状提出 34 名）、その後の懇親会では、大いに盛り上がり親睦を深めました。8 月 18 日に出雲市民会館で開催された県獣医学会では、当支部から、齋藤英利香氏（家畜臨床技術センター）の「稲 WCS 多給農家で見られた食餌性ケトosis」、鈴木郁也氏（家畜病性鑑定室）の「島根県内で分離された *Mycoplasma bovis* の薬剤感受性調査と分子系統樹解析」、白濱 潤氏（出雲ペットクリニック）の「両側の橈骨尺骨骨折に REGENEBONE®を施し治癒したトイプードルの一症例」の 3 演題が発表されました。9 月 13 日の JA しまね出雲地区本部和牛共進会（佐田畜産センター）には齋藤理事が臨席するとともに、優良牛生産者に対して表彰と副賞授与を行いました。10 月 17、24 日の支部ボウリング大会、囲碁大会にはそれぞれ 8 名、4 名が参加し、和気あいあいとした雰囲気の中、しまね和牛加工製品などの景品をめぐり真剣勝負（？）が行われました。11 月 18 日には支部研修として畜産技術センターで開催された「牛のゲノミック評価技術普及啓発セミナー」、「種雄牛展示会及び新種雄牛施設公開」に県職 OB の会員を中心に 13 名が参加し、新たな知見・情報について学ぶとともに同センターの新種雄牛施設と悠々と闊歩する種雄牛を見学しました。

引き続き次年度においても、研修会や厚生事業などを企画し、知識・技術の研鑽を重ねるとともに、会員同士の交流をさらに深めていきます。

編 集 後 記

令和 4 年 3 月、会報 No. 44 号を発行して以来、3 年半ぶりに会報 No. 45 号を発行します。

平成 28 年以降、各種原稿をいただいておりますが、会報への掲載を怠ってきたことに対し、原稿を寄稿していただいた方々に深くお詫び申し上げます。

会報の発行は、本会の運営状況及び事業内容を会員へ周知するとともに、会員相互の親睦と情報交換を目的としています。また本会の事業内容や活動状況を一般の人に広く知らせるためにも、重要な事業の一つです。

本会は、毎年 2 回の会報発行を計画しておりますが、この 9 年間に至って僅か 3 刊に留まっております。このことは、事務局のみならず業務執行役員の責任であると猛省しています。今後はこのようなことがないよう、適切な業務運営に努めますので、引き続き会員の皆様の御理解と御協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、今回の会報では掲載できませんでした新規会員情報などにつきましては、次回号で掲載することとし、今後は適宜発行することに努めますので引き続き御協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

（業務執行役員一同）

島根県獣医師会報 No. 45

(2025 年 8 月)

発行責任者	会 長	安食 政幸
編集委員 (順不同)	委員長	濱村圭一郎
	委 員	原 陽子
	委 員	藤原 浩美
	委 員	廣江純一郎
	委 員	野中 雄一

編集兼発行 公益社団法人島根県獣医師会
〒690-0887 松江市殿町 19 番地 1
Tel : 0852-24-2914
Fax : 0852-24-2925

印刷所 明和印刷有限会社
〒690-0822 松江市下東川津町 61-5
Tel : 0852-22-3196
Fax : 0852-22-3306